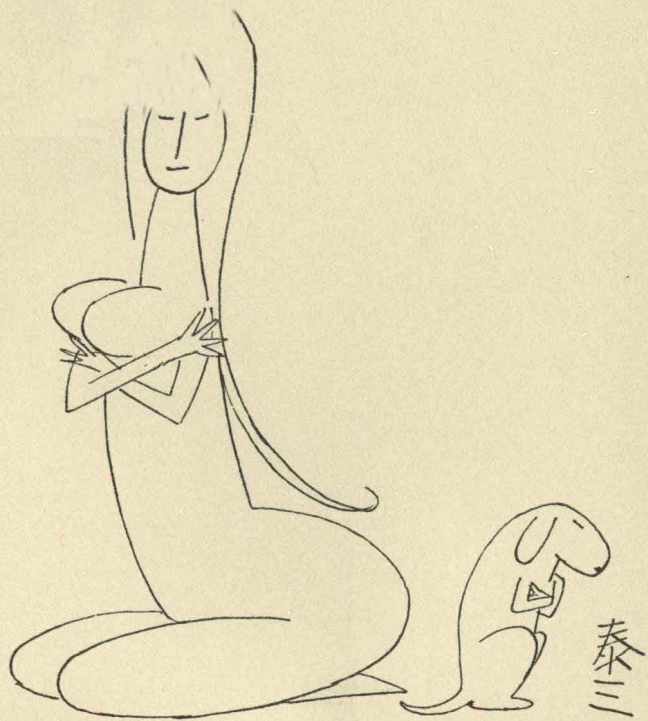




犬をえらばば ■ 安岡章太



犬をえらばば■安岡章太郎

# 安岡章太郎

好評の著作

純文学書下ろし特別作品

花

祭

大人の世界を知ることによって、清純な夢と想像がはかなく消え去ってゆく少年の性の目覚め。悲しみと不安と焦燥にうづく少年期の心理を鮮やかにえがいた傑作長編。  
四四〇円

海辺の光景

いつも干満をくりかえす海辺の自然を背景に、精神病院で狂死してゆくある母親の死を描いて野間文芸賞を受けた著者の代表作「海辺の光景」ほか「愛玩」など七編収録。  
文庫版 一一〇円

質屋の女房

処女作「ガラスの靴」、芥川賞受賞作「悪い仲間」をはじめ、表題作「質屋の女房」など、巧まざるユーモアがあふれる新鮮な文章で独自の世界をひらいた好短編十編を収む。  
文庫版 一一〇円

良友・悪友

柴田錬三郎、梅崎春生、遠藤周作、吉行淳之介、小島信夫など現在文壇の第一線で活躍する先輩同輩を俎上にのせ、ユーモラスなタッチで描いた現代作家のうらおもて。  
三八〇円

不精の悪魔

なまけものを標榜し、不精をきめ込んでいる暇に磨いた柔軟な批評眼——作家の眼がとらえたユニークな作家論、明晰な文学論、新鮮な感覚の随想など評論二十三編を収録。  
三九〇円

# 目次

犬は飼い主に似るか？ ..... 七

——江藤淳における平等思想——

近藤啓太郎の親切心について ..... 三

コンタと命名 ..... 三七

人犬一如、コンタとゴリ ..... 五三

人徳犬徳 ..... 六七

——丹羽氏の仁、石坂氏の徳——

佃煮とシチューと飼犬と ..... 八三

——安吾夫人の愛情——

遠藤狐狸庵のダメニシ庵犬 ..... 九

黒きは猫の皮にして、白きは ..... 二七

——吉行淳之介のナミダ?——

花の三十四年 ..... 一三

隣家の犬 ..... 一五二

——志賀文学と動物——

マニアの心情 ..... 一七一

——五味康祐のメカニズム——

交尾 ..... 一八五

装幀・カット  
横山 泰三

犬をえらばば



犬は飼い主に似るか？

——江藤淳における平等思想——



犬は飼い主に似るといふ、こういうことを言い出したのは、きっと犬も猫も飼う気のない——  
或いは、すでに飼うことをアキラめた——人であるにちがいない。

すくなくとも、これは現に犬を飼っている人には言えつこない言葉だ。いま自分が飼っている  
犬に自分自身が似ている、こんな怖ろしいことは、普通の人間に考えられることではない。こと  
ほど左様にこの言葉は、犬なり、人間なりを、正確に、かつ冷酷につかんでいるのである。

実際、犬が飼い主に似ること、これは単に犬に於ける環境の影響力の大きさといったことでは  
なく、むしろ一種宿命論的な血縁関係を感じさせるほどのものである。

志賀直哉氏の小説に、夜遅く自分が家へ帰ってくると、よろこんで跳びついてくる犬に向つて、  
「お前は好いやつだ。世間には『犬にも劣る』などという言葉があるが、そういうことを言う人  
間の大半は、実際に犬に較べてはるかに下等な動物だ」

という意味のことを述懐する場面を書いたものがあり、これを「志賀氏の人間蔑視のあらわれ  
である」とフンガイする批評もあるが、これなどは犬と人間とはどちらが高等かという価値論で  
はなく、犬と飼い主との同化をあらわしたものと言ふべきである。要するに、犬には飼い主の  
顔がうつっており、飼い主はそれに向つてヒトリゴトをつぶやいているに過ぎない。

つまり犬を飼うということは、そういう孤独な遊びであつて、犬をつれて散歩している人は、

孤独な自分のタマシイを犬の姿に結晶させ、それを引っぱって歩いていると言ってもいいのである。

人間が犬を飼いはじめて、どれぐらいになるのか、私は知らない。エジプト時代の彫刻には、すでにダックス・フントに似た犬が、椅子に腰かけた主人の足もとに腹這っているものがあり、これによっても犬の歴史はエジプトよりはるかに古いことだけは、たしかだろう。ダックス・フントというのは、土管みたいな胴体に、水掻きみたいな短い脚がくっついて、全体にヌラヌラした感じで無気味であるが、一びきの野性の犬があんなに人工的な姿態につくられるまでには、よほどの長い歳月を要したはずである。エジプト人はきつと毎日、朝となく晩となく、一びきの犬を塩水につけたり、油をすりこんだり、餌にナメクジを食べさせたりして、あんな犬ともオットセイともつかぬ動物をこしらえ上げたわけだが、私はその根気の好さに驚くと同時に、捉まえてきた犬の胴体が次第次第にエジプト人の鼻みたいな恰好に、長く長く延びて行くさまを想像すると、そこに親和力というものの恐ろしさを感じないではいられない。

ダックス犬の胴体がエジプト人の好みで、あんなに長く引き延ばされると同時に、エジプト人の鼻もダックスの面倒を見ているうちに、どんどん長く延びて上唇にとどきそうなほどに垂れ下ってしまったのかもしれないか。犬が飼主に似るものだとしたら、人間だって飼っている犬に似てくる道理であろう。——すくなくとも、犬好きの人の眼を見ると、たいていは

犬の眼にそっくりに思われてくる。

たとえば江藤淳と向い合っていると、よく私は江藤の顔が真つ黒な毛に覆われたコッカー・スパニエルのそれに見え、熱っぽい口調で語りかけてくる江藤の声が、突如、私の耳のなかで、  
「わんわん、ウー……」

と、犬の吠える声になって聞えてきやしないかという幻覚になやまされる。

勿論、幻覚はそれを起す側にも問題があるのであって、この場合は江藤が犬好きであるということが、私の中で犬的な反射作用を起しているに過ぎない。つまり私が犬になってみたいという気持を、どこかで起すために、江藤の顔が犬になって見えるということなのであろう。決して、江藤自身に犬的な要素が濃厚で、そのために一瞬彼が犬に化けるといふわけではない。

しかし、このような幻覚、ないしは反射作用を起すのに、私の側に問題があるとしても、それは決して私一人のことではない。江藤のまえでは誰でも多少とも、このような状態にならざるを得ないところがある。とくに彼の家庭を訪問した場合は、必ずや、そうである。

私は、市ヶ谷の江藤のマンションをたずねて、玄関のホールに立つと、まずエレベーターのボタンを押すときから、アメリカの南部人が、北部人（ヤンキー）の家庭のパーティーと呼ばれるときの心境にならざるを得ない。つまり私は自分自身に向って、

（汝、これより犬に対する偏見を捨てよ）

と、口の中で三べん程は、つぶやきかえすのである。——ご承知のようにアメリカの南部人は黒人に対する人種偏見を捨てていないが、これは私たちが犬を犬であると思っているのと同じぐらい強い偏見なのである。

ところで、江藤の家では犬が家族の一員である、というより家庭の中心は犬なのであって、そのことを失念しては江藤の家で招客の役はつとまらない。私は一度、江藤夫人がロマノフのキャビアのカナッペを、犬のダーキイに食べさせようとしているのを見て、つい思わず、

「あ、もったいない！」

と叫び、江藤夫妻の失笑を買った。キャビアといえば、欧米人の珍重する食糧だが、とくにその日のキャビアは江藤の親戚の外交官がソ連のおみやげに置いて行った本場モノで、これをレストランでたのむと、カクテル・グラスの底にちよっぴり盛ったやつでも、簡単に千円ぐらいはとられてしまう。そのキャビアを山盛りにしたカナッペを、犬にくれてやろうというのであるから、私が叫び声を発したのも、あながち品性下劣のためとばかりは言われない。私は、そのようなことを江藤夫妻に、ひと通り説明してきかせた。

「へーえ、これがそんなに高いものなの？　ちっとも知らなかった」

江藤の細君は、いかにもものめずらしげに自分の手にしたカナッペを眺め、それからおもむろにチンチンしている犬に向って、

「ねえ、ダー子、これはとっても高くて、おいしいものなのよ」

と話しかけながら、あんぐり開いた犬の口に押しこんでしまった。

こういうことでショックを受ける人がいたら、まだその人は犬に対して偏見を持っていることになる。

《世に親馬鹿というものがあれば、犬馬鹿というものがあっても不思議はない。ところで、現在は、その「犬馬鹿」というものの典型になりつつあるところである。》（「犬馬鹿」江藤淳）

《彼はすっかり父親らしくなった。それはダーキイという犬がわが家の娘になってからである。ダーキイが来たときからわたしは、彼をパパと呼ぶことにした。》（「夫のこと」江藤慶子）

これは江藤の「犬と私」という本からのヌキガキだが、私はこれを読んで彼等夫妻の仲むつまじさにアテられた。しかし本当は、彼等の犬に対する情愛にアテられたというべきであることが、だんだんにわかってきた。

もっとも、これはどうだっていいことだ。よその家の夫婦仲がよくてアテられるのも、その夫婦が犬を仲立ちにして仲良くしていることでアテられるのも、同じことだからだ。要するに、アテられるというのは、愛し合っている他人同士を前にして、自分はその中に入って行けないというだけのことである。これを当世流に言えば、疎外感に陥るというわけであるが、このような疎外感から脱け出るためには、どうしたってこちらは《犬》になって見せる他はない。その結果、江藤と話している間、ときどき江藤の顔が犬になって見えてくるという錯覚を生じることも、避け難い。そして、もしどうガンばってみても《犬》に同化できないとなると、そのときには批評

家になるより仕方がない。

「犬は飼い主に似るものだ」

などという言葉が浮んでくるのは、そういうときである。

私は、坂口安吾氏を生前一度だけ、桐生のお宅に、文芸雑誌のインターヴューをとりたずねたことがある。安吾さんは当時、書上さんという土地の旧家の離れ家を借りて住んでおられたが、何しろ屋敷内にクジャクの鳥小舎があったり、ゴルフの屋内練習場があったりするような家だから、離れといっても普通の独立家屋より、ずっと大きく、たとえば便所なんかも、ケヤキ造りの板の間が、六畳間ぐらいの広さで、座敷はみんな、ちょっとしたお寺の本堂みたいにガランとしていた。

安吾さんは、その家でコリー犬を二頭飼っていた。テレビの「名犬ラッシー」がそうだったように、外国人はよくコリーでも何でも家の中で飼うらしいが、日本人でコリーを家へ上げて飼っていたのは、安吾さんぐらいのものではなかったろうか。玄関をあげると、いきなり顔の長さが三十センチぐらいありそうなコリーが、式台の上からこちらを眺め下ろしていたのには、びっくりした。……たしか、この犬が「ラモー」というハイカラな名前で呼ばれていたと思うのだが、毛のふさふさしたラモーが、つかつかと座敷の中を大股に巨体をゆさぶりながら歩くところは、いかにも安吾的な感じだった。

犬も、これぐらい大きくなると、イヤでもその存在を失念するわけには行かない。私は安吾さんを訪問して、何時間かお邪魔している間、ほとんど犬のことばかり考えていたと言ってもいい。実際、安吾さんのお話をうかがいながら、そのメモを取ろうなどとしているとたんに、頬っぺたを毛皮で撫でられ、

「フン、フン」

という生温かい吐息をふきかけられて、ふと見ると、ラモーが私の背中ごしに、その長大な鼻づらを私の顔に寄せているのである。これではラモーが、いかにおとなしく飼いならされた善良な生きものであるとも、私としては脅威を禁じ得なかったわけだ。あえて言えば私は、ラモーに迎合<sup>げいごう</sup>していたかもしれない。

さいわいにも、ラモーは客人である私には何らの危害を及ぼさなかった。しかし安吾さんが私に向って何か話し掛けているスキに、皿の上のトンカツをひょいと口にくわえて、安吾さんが、「ああコレコレ、ラモー、何をする」

などと呼び上げるヒマもなく、二た口か三口で、たちまち丸のまま、手のつけてないトンカツを平らげてしまったのである。動作は決してコセつかず、悠然とふるまっているのだが、何しろ体軀が大きいので、アツと言う間にこれぐらいのことはやってしまう。

「こいつは、お客さんが好きなのだよ。客が来るとウマイものにありつけることを、ちゃんと知っているのだよ」